

# 國學院大學学術情報リポジトリ

## 伊豆半島北部出土の銅鐸片

|       |                                                                                                         |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2023-02-09<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 楠, 恵美子<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.57529/00001996">https://doi.org/10.57529/00001996</a>                       |

# 伊豆半島北部出土の銅鐸片

楠 恵美子

## 要旨

銅鐸の集中出土範囲は静岡県天竜川を東限とするが、銅鐸片は天竜川を越えた伊豆半島北部の沼津市藤井原遺跡・伊豆の国市段遺跡にも存在する。これら古墳時代前期まで伝世したと見られる銅鐸片とは異なり、完形の銅鐸を持つ天竜川西岸の銅鐸片には、再加工痕や二次的使用の形跡が認められない。そこで、銅鐸形銅製品（小銅鐸）の多数出土する関東地方から、東海地方にかけての土器様相などに目を転じてみると、弥生時代後期における伊豆半島が地域間交流の谷間にあったことが見えてくる。これらの現象から、伊豆地域における銅鐸片は単なる銅素材としてではなく、再加工して保有するだけの価値が認められていたと考えることができよう。

## キーワード

伊豆半島、銅鐸、再加工、伝世

## I. はじめに

伊豆北部では、沼津市藤井原遺跡と伊豆の国市段遺跡から、銅鐸の破片資料が出土している。破片資料とはいうものの、そもそも伊豆地域は銅鐸の出土が盛んに用いられた地域からは外れているため、このような小片の意味するところを追及することも、弥生時代から古墳時代への転換期にあたる地域的様相を考察する上で一定の意義を有するであろう。

もちろん、これらの資料が、どのような経緯で伊豆北部に持ち込まれたのかを追及することは難しいが、資料そのものを検討することによって、何らかの用途が期待された再利用品だったのか、青銅製品に再加工される予定の素材だったのか、といった疑問については、ある程度考えていくことができる。また、弥生時代末まで銅鐸を用いていた地域や、古墳時代初頭まで銅鐸形銅製品（小銅鐸）が見られる地域との比較を試みることで、銅鐸片の性格や、伊豆地域の特性も把握していくことが可能となろう。ここでは、これらの課題について十分な検討を行うことはできないが、関連する資料や、従来の研究状況などについて触れつつ、今後の検討課題をまとめておきたい。

## II. 伊豆における銅鐸片出土遺跡

### (1) 沼津市藤井原遺跡（瀬川・鈴木・杉山編1977）

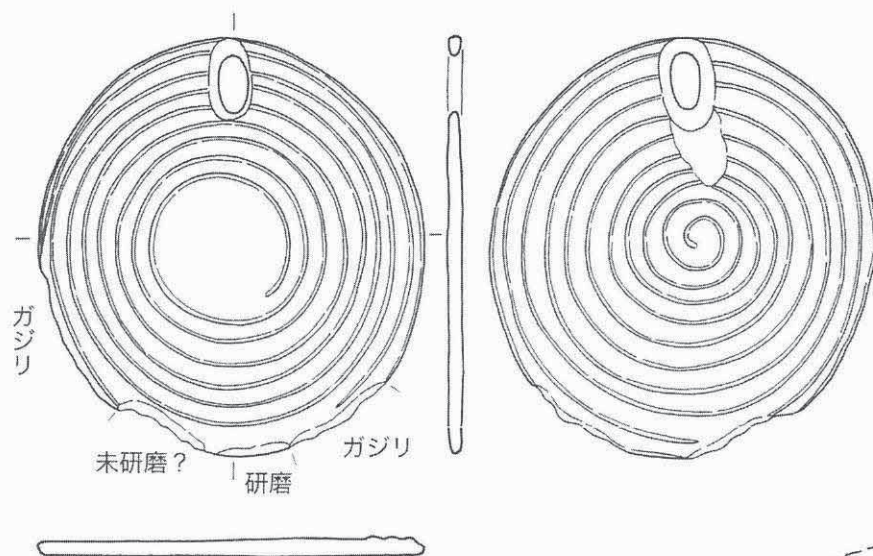
藤井原遺跡は、狩野川流域の大規模複合遺跡であ

り、おおむね弥生時代中期から近世までの遺構・遺物が検出されている。銅鐸片は、近畿式銅鐸の鈕に見られる双頭渦紋飾耳であり（第1図）、五領期に属するとされた153号住居址の覆土上層から出土した。直径約6cmの楕円形を呈し、厚さは約0.15cmである。上端には1ヶ所の孔が穿たれ、孔の周囲には紐状のもので懸垂した痕跡と思われる磨滅が認められた。

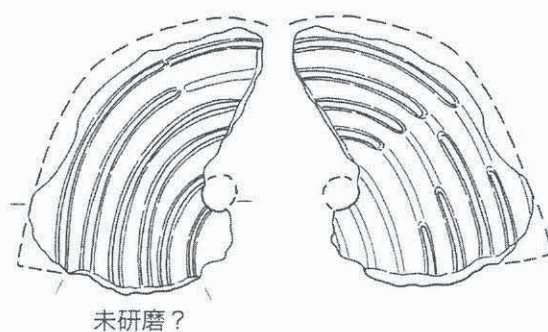
残念ながら、銅鐸片の埋没状況には不明な点が多いが、前後する時期の資料としては、近畿の古式土師器や東海地域に由来するS字状口縁台付甕など、他地域の土器群も見られ、遺跡の性格を窺う手掛かりとなる。また、破片に残された磨滅痕は、資料が長期にわたって使用・伝世された事実を反映するものである。銅鐸本体が、どこで破壊されたのかは判らないものの、ある段階で藤井原遺跡に持ち込まれた銅鐸（銅鐸片）が、古墳時代前期まで伝世され、竪穴建物の埋没過程で土中に混入したのであろう。

### (2) 伊豆の国市段遺跡（漆原編1994）

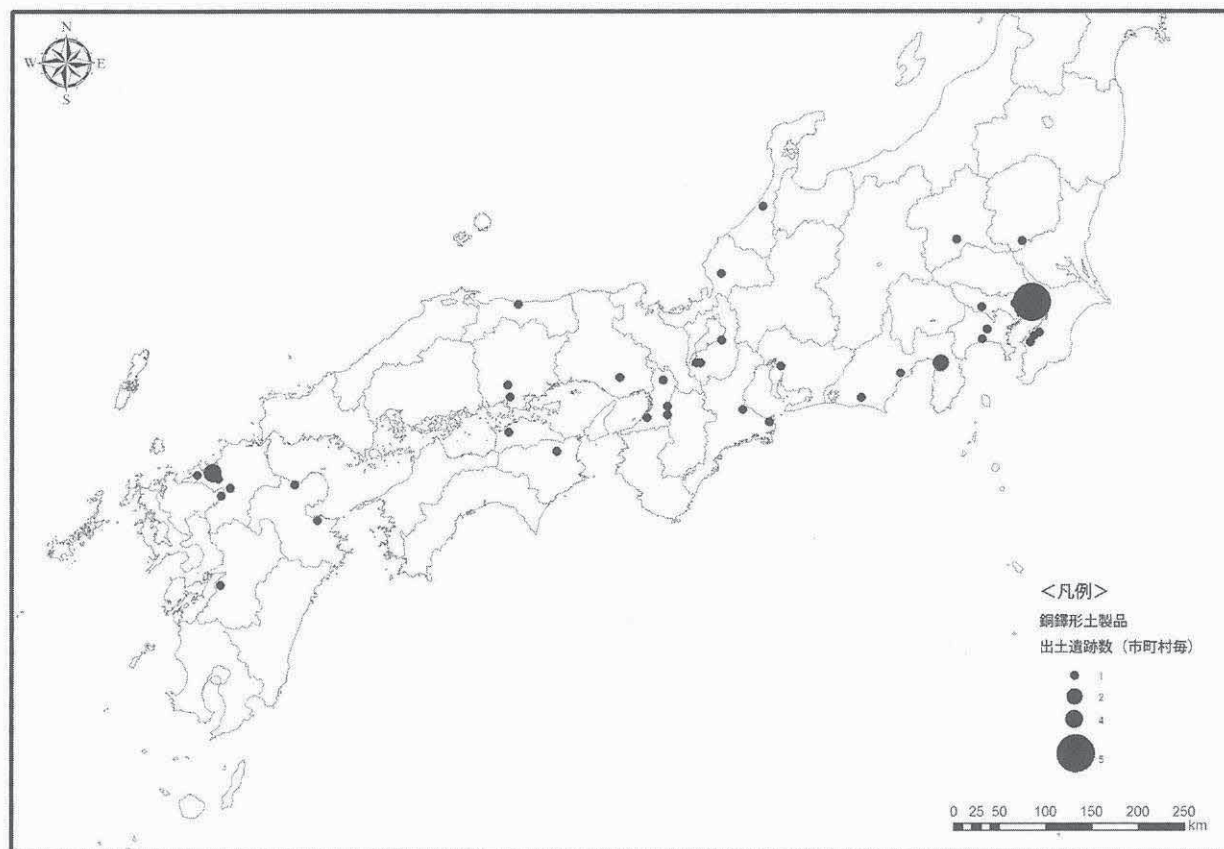
段遺跡は、狩野川と深沢川が合流する地域の田京台と呼ばれる台地上に位置し、縄文時代から近世までの資料が検出されているが、古墳時代の建物跡が主体的であり、方形周溝墓も見られる。銅鐸片は、藤井原遺跡例と同様に、近畿式銅鐸の双頭渦紋飾耳片であり（第2図）、C-10グリッドの第Ⅶ層付近から出土した。飾耳は四分の一程度しか残存してお



第1図 藤井原遺跡 (松井2002)



第2図 段遺跡 (松井2002)



第3図 銅鐸形銅製品出土遺跡分布図

らず、直径は推定約7cm、最大厚約0.23cmである。孔が開けられていた痕跡がみられるが、渦紋に顕著な磨滅痕は見られないため、行方不明の破断した部分が上位となって懸垂されていた可能性がある。

前後の時期に関係する資料では、弥生時代の土器が少ないものの、古墳時代初頭の大廓式土器が多く見られた。第Ⅶ層は、古墳時代の建物跡が営まれた第Ⅶb層と、建物跡の埋土に相当する第Ⅶa層に分けられているが、藤井原遺跡例と同様に、銅鐸片は古墳時代以降に埋没したと考えるのが妥当であろう。

### Ⅲ. 伊豆北部の特性

#### (1) 銅鐸と銅鐸形銅製品

先述したように、これらの銅鐸片が出土した伊豆北部は、銅鐸分布域の埒外にあった。銅鐸の東限は、これまでに7個体の銅鐸が出土したことから「銅鐸の谷」と呼ばれる浜松市細江町中川滝峯周辺や、三遠式銅鐸をそれぞれ2個体ずつ持つ和田町永田・木船遺跡出土や芳川町ツツミドリ遺跡など、浜松市を中心とする地域に当たり、天竜川流域以東では完形の銅鐸や、銅鐸の埋納は認められないのである。

ただし伊豆北部でも、沼津市の閑峯と陣ヶ沢から、各1個体の銅鐸形銅製品が出土している（齋藤2008）。銅鐸形銅製品は、西日本では概ね青銅器の出土地域と重なって用いられたが、東日本では千葉県の内房地域を中心とする南関東地方に分布が集中しているほか、福井県や石川県などからも出土した。いずれも、銅鐸を盛んに用いた地域からは周縁的な地域にあたる（齋藤2008、第3図）。これらの銅鐸形銅製品は、銅鐸を模倣して作られたものと思われるが、地域によってやや出現時期が異なり、東日本では古墳時代前期以降の例も多い。

ところで、このような青銅器の様相は、地域的な特色を示す土器の分布状況とも対応しているようである。大野勝美氏は、「西遠江から外へほとんど移動しない装飾高杯と粘土帯が巻かれた甕が天竜川東岸地域と関東地域だけからは多量に出土している」と指摘している（大野2004、第4図）。中間的な伊豆地域にも、西遠江欠山様式など（佐藤1990）、他地域の土器が流入しているが、このような極めて特徴的な土器は見られないのである。

#### (2) 周辺地域の銅鐸片

では、伊豆北部から出土した銅鐸片と、周辺地域の類例とでは、何らかの差異、もしくは共通性が認められるだろうか。管見の及ぶ限りの例を挙げて、比較検討の素材としよう。

袋井市掛之上遺跡からは、部位不明の銅鐸片が出土した（松井2002、第5図）。銅鐸片は、弥生時代中期に属する3号方形周溝墓の方台部内に穿たれた小穴上層から発見された。共伴遺物は、明確な時期が不明の弥生土器が数片出土したのみで銅鐸片の確実な廃棄時期は分らない。同じ方台部上では、その他の土坑から弥生時代後期後半の土器が出土しており、同時期の柱穴も検出されているため、銅鐸片の廃棄を弥生時代後期と考えることもできるが、古墳時代後期に掘られた柱穴に銅鐸の破片が混入した可能性も全く否定はできないという。

浜松市梶子遺跡（旧国鉄浜松工場内遺跡）からは、飾耳部分と思われる銅鐸片が、A4区土坑2内に廃棄された形で出土した（太田1983、第5図）。土坑内からは、多数の土器片と太型蛤刃石斧も共伴して出土し、弥生時代末以降に、これらがまとまって廃棄された状況が窺われる。

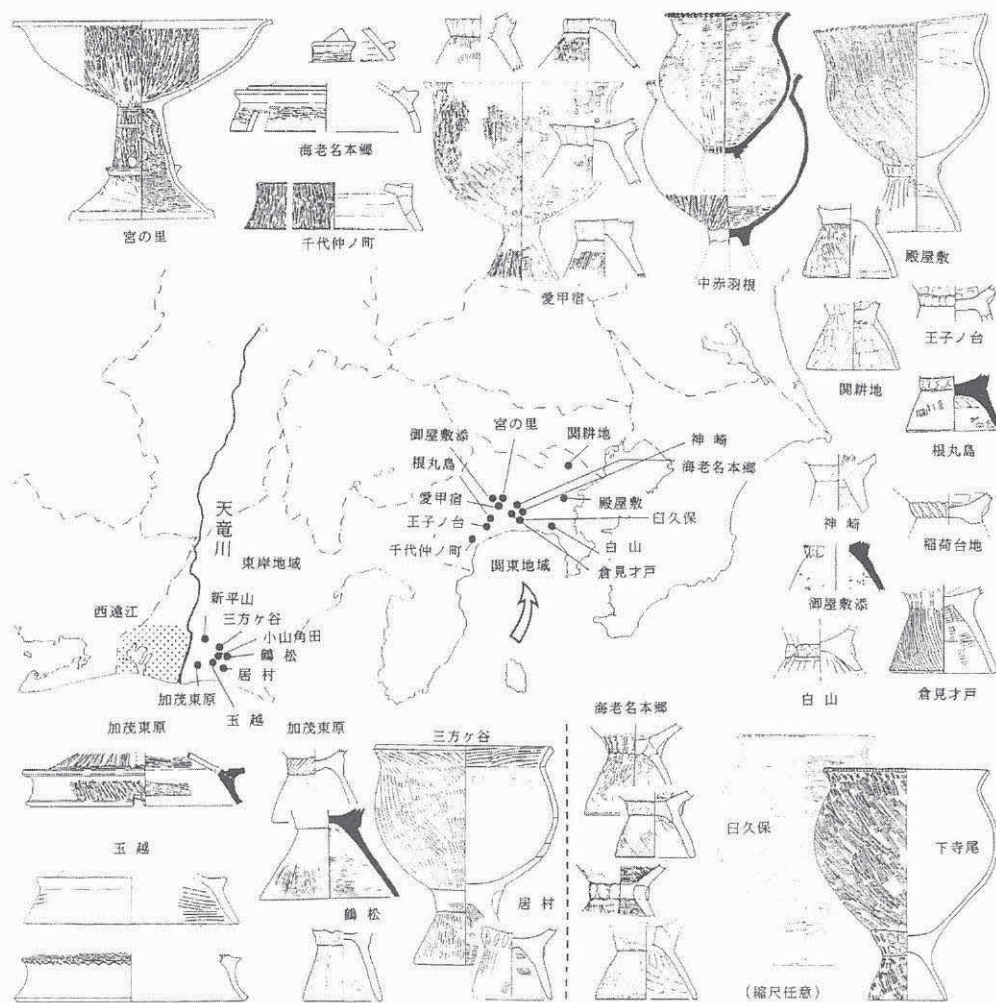
同市松東遺跡のSX08からは、藤井原・段両遺跡と同様に近畿式銅鐸の双頭渦紋飾耳片が出土している（佐藤・藤谷1990、第5図）。SX08の埋土は幅広い年代幅の遺物を含んでおり、明確な廃棄時期は不明である。

以上の3遺跡から出土した全ての銅鐸片には、明らかな加工痕が認められないようであり、二次的に使用された形跡も見られない。むしろ土坑からの出土など、単なる廃棄の様相が強い例である。

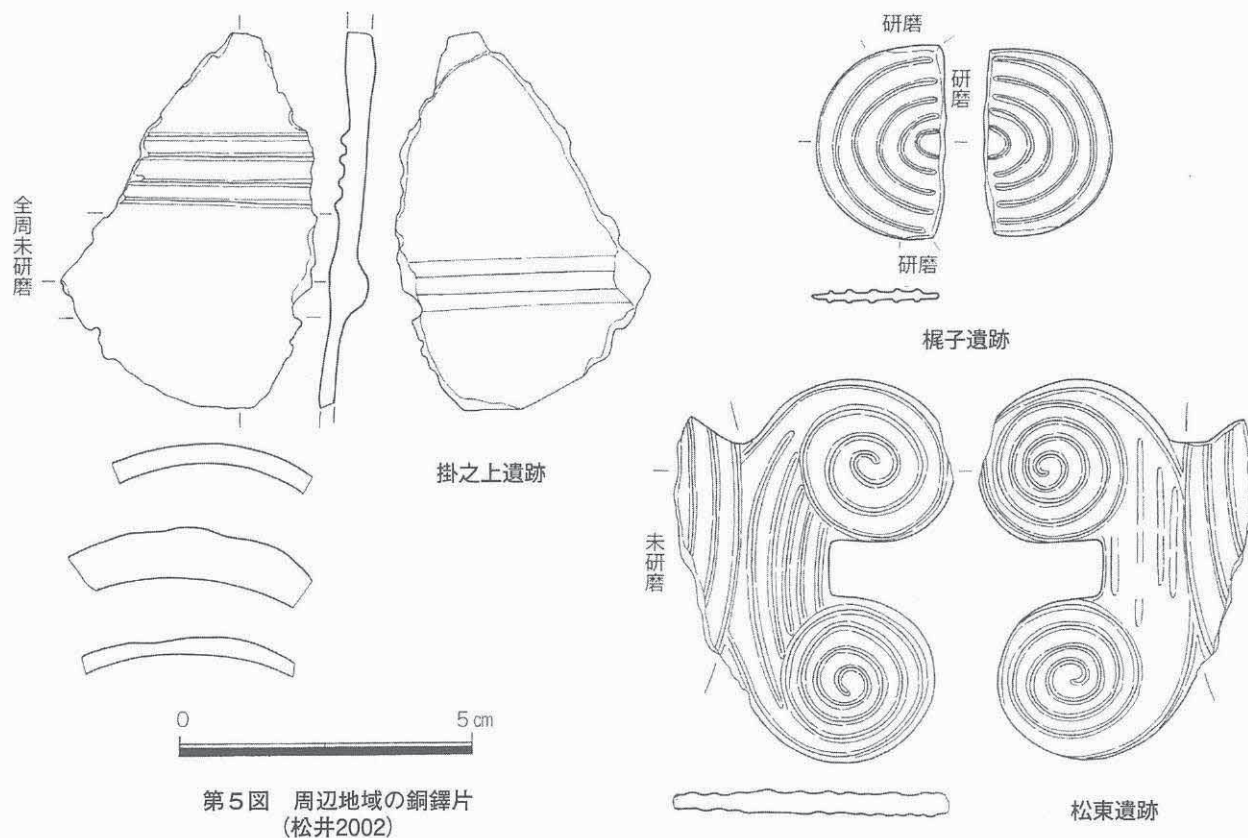
### Ⅳ. 小結

先述したように、銅鐸の終焉と、銅鐸形銅製品の終焉の間にはタイムラグがあり、必ずしも両者の分布域を直接比較することが妥当とも思われないが、天竜川付近を東限とする銅鐸分布圏と、銅鐸形銅製品分布圏の中間に伊豆北部が位置する事実を無視するわけにはいかない。また、土器の様相から見ても、伊豆北部はあたかも地域間交流の谷間のような位置にあったと見るべきであろう。

そのような伊豆北部では、銅鐸を入手することは



第4図 天竜川を越えた装飾高杯と粘土帯を巻いた甕 (大野2004)



第5図 周辺地域の銅鐸片 (松井2002)

できなかったものの、ある段階で銅鐸の破片、もしくは破片の加工品がもたらされ、古墳時代前期頃まで伝世することになった。これらの破片が廃棄されるに至る過程は不明だが、同じ静岡県内でも銅鐸分布圏に属する浜松市梶子遺跡・松東遺跡出土例は、未加工の単なる銅鐸片であることに注意したい。ここでは、破壊された銅鐸に改めて2次加工を施し、再び何らかの象徴的な役割を負わせたとは考えられない。むしろ、造形そのものには価値のない銅素材としか認識されていなかった可能性が高いのである。一方、伊豆北部の出土例は、いずれも穿孔を施されており、紐状のもので懸垂したと考えるのがよからう。特に、藤井原遺跡例の表面に顕著な磨滅痕が見られるように、長期の伝世が想定されることは見逃せない。銅鐸が及ばなかった伊豆北部では、二次加工された銅鐸片が少なくとも古墳時代前期まで用いられていたのである。

もちろん、これらの破片をペンダント状に加工して懸垂していたからといって、伊豆北部に所謂生粋の銅鐸祭祀の思想的影響が及んでいたとは言い難い。しかし、ここで見た様々な事情を鑑みると、どこかで破壊された銅鐸を、青銅素材として用いるか、何らかの象徴的器物として再利用するかの判断を迫られた主体は、まさしく伊豆地域の住人であったと考えるのが妥当であろう。銅鐸片を再加工せずに放棄した遠江地域の住人に対し、彼らは在地では入手で

きない青銅素材を再加工して用いることを選択した。それは、銅鐸形銅製品を珍重することになる関東の住人とも異なる、境界領域特有の判断であった可能性もあろう。今後は、集落の動向や、土器の流通状況なども含めた具体的地域像を明らかにしていく中で、このような見通しについて再考していくこととしたい。

#### 参考文献

- 漆原稔編 1994 『山崎・段遺跡発掘調査報告書』大仁町教育委員会  
大野勝美 2004 「銅鐸形土製品考－銅鐸祭祀の東限を考える－」『財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所設立20周年記念論文集』静岡県埋蔵文化財調査研究所  
斉藤秀一 2008 「福井県越前市（旧武生市）瓜生助遺跡出土の小銅鐸について」『岡山理科大学埋蔵文化財研究論集』岡山理科大学埋蔵文化財研究会  
佐藤由紀男・藤谷みほ 1990 『浜松市松東遺跡発掘調査報告書Ⅱ』（財）浜松市文化協会  
瀬川裕市郎・鈴木裕篤・杉山治夫編 1977 『藤井原遺跡第3次発掘調査概報』沼津市教育委員会  
太田好治 1983 『国鉄浜松工場内遺跡 第Ⅶ次発掘調査概報』浜松市遺跡調査会  
松井一己 2002 『掛之上遺跡Ⅸ・Ⅹ』本文編 袋井市教育委員会  
向坂鋼二 2000 「県内発見銅鐸とその特徴」『敷地西の谷遺跡出土銅鐸をめぐって』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所